

# 伝統行事による国際交流

— 夏祭り『盆踊り』開催による日本人としての自覚と現地の人々との出会い —

前ニューデリー日本人学校 教頭

兵庫県伊丹市立北中学校 教頭 豊田 實

キーワード：国際交流, 伝統文化, 開かれた学校運営 (参画と協働)

## 1. はじめに

2007年は日印交流年（インドにおける日本年：Japan-India Friendship Year2007）であり、日本文化や芸術を広くインドに紹介するイベントが年間を通して実施された。メディアでも伝えられているように経済が急成長を続けるインドにあって日本企業の進出が激増している。ニューデリー日本人学校は2006年度3月に69名であった児童生徒数は、2008年2月末には144名に増加した。2年で2.1倍の急増ぶりである。事前に学校へ問い合わせるケースも転入生の保護者に限らない。企業が生活環境調査と称して駐在員のための事前調査に来校することも多くなっている。学校運営理事会での情報では、企業の本数はほんの数年で過去30年間かかって増えた数と同じぐらいの数増加したとのことであった。また、インド国内では、圧倒的に他都市よりもニューデリー内もしくは近郊に拠点を構えることが多く、家族帯同で渡印するケースが際だってきている。

日本人学校は教育活動を優先しながらも、日本人コミュニティが集う場としての機能もある。当寄稿内容の夏祭りはデリー日本人会青少年児童部主催で日本人学校が事務局となり全面芝生の運動場を会場にして毎年9月後半に実施される。夏祭りは大きなイベントであり、関係機関や日本人会コミュニティとの調整を図る上で渉外を担う教頭職というポストに大きな期待がかかる。学校児童生徒、教員、現地スタッフ、保護者、有志、事業所等が総力を挙げて取り組んでおり、日頃から交流のあるインドの知人や国際学校等多くの人をゲストとして招待し総勢約1,200人もの人々が祭りの楽しみと国際的な交流の場を求めて参加している。日本の伝統文化である盆踊りを中心とした催しや出店を楽しんでいる。

夏祭り「Bon Dance Festival」

### ○プログラム

- (1) 開会あいさつ
- (2) 御輿巡幸（子ども御輿、大人御輿）
- (3) 模擬店開始
- (4) 1回目盆踊り
- (5) 花火打ち上げ鑑賞
- (6) 2回目盆踊り
- (7) 閉会時まで模擬店、閉会あいさつ



This is a portable shrine.

## 2. インド国内の宗教的なお祭りと日本の盆踊り

インドでは、一般的に娯楽産業の発展が一部に限られているので、人々は宗教的な祭りに楽しみをし、大いに盛り上がる。特にHOLI（ホーリー：3月）、RAKSHA BANDHAN（ラクシャバンダン：8月）、DUSSEHRA（ダセラ）、DIWALI（ディワリ）などは、家族を愛する気持ちを表したり季節の到来を告げる意味のあるものや神々に対する祈りや繁栄や幸運を願って全土で繰り広げられる。ホーリー祭ではすべての人を対象に色粉や色水をかけあって喜び騒ぐので外出できないほどである。生活が祭り一色になることから、子ども達も現地理解の感覚で捉えることがで

きる。このようなこともあってインドに在住する間に、少なからず母国への郷愁にかられる人もあり子ども達に日本の祭りを体験させたいという願いを持つ邦人は多い。協賛する方も多く、年に1度の夏祭りということで模擬店などを運営し楽しむ人々の熱気が感じられる。

### 3. 児童生徒を取り巻く環境

治安は落ち着いて良さそうに見えるのだが、国内全般には未だ暴動が発生することもある。幼い児童生徒自身が街角を一人で歩くことは、まず考えられないといった状況である。このため、日本人のみならず現地の人達も特に富裕層は近所の公園へ行くときにも親や使用人が付き添っている。大人にとっても同様で、女性は夜間に一人でタクシーやオートリキシャを利用することは控えねばならない。爆弾テロも度々発生する。当方の滞在中にもデリー内でも人が多く集まるモスクで爆弾が仕掛けられたり、公共バスが焼き討ちにあったりした。ムンバイでは、旅客列車を狙った爆弾テロがあり、複数の爆発によって多くの人が亡くなっている。

子ども達にとっては、学校近辺の校外学習でも教員と護衛者（チョコゲール）に見守られながらの集団行動である。自ら街で買い物をするなどの体験は日常的なものではない。故に学校という安全を確保された場所で充実した体験を願うといった志向になるし、多くの保護者の期待するところでもある。

### 4. 夏祭りの規模とねらい（子どもの祭り体験、現地交流、日本人コミュニティの実感）

ニューデリーには近辺を含めて約2,200人の邦人が在住する（07年4月現在）。夏祭りには、付属幼稚園・小中学部生徒の家族、交流する現地校、国際学校生徒、日本から現地大学への留学生、企業駐在員、招待した地域住民等が参加する。

本校運動場は全面芝生であり夕刻の涼しさを満喫できる環境である。多数の来場者があるのだが、子どものための祭りであることに主眼を置いた企画で進めることになる。盆踊りや夜店（模擬店）を演出し、子どもと共に楽しみを分かち合える一夜となるよう参加姿勢について協力願っている。

## 5. 企画運営と組織

### (1) 実行委員会組織

学校教員がリーダーシップをとって進める。PTA役員、模擬店代表者（PTA3部会、付属幼稚園保護者・プレ子ども会、アメリカンスクール保護者、企業、個人事業所、大使館等公的機関や福祉活動を行うボランティアグループ等日本人会サークル、有機農業普及活動グループ等）は20数店となっている。この他に本校から児童生徒会のゲームコーナー、中学生グループによる焼きそば販売等、子ども達自身も模擬店を運営する。実行委員会役員と模擬店代表者によって協議を3回行う。第1回目は実施2ヶ月前に準備組織の立ち上げ、模擬店の出しものや情報交換を行い調整する。昨年の成果や改善内容を確認する。

#### ① 模擬店内容

金魚すくい、ヨーヨーつり、人気キャラクターお面、手作りゲームコーナー、綿菓子、たこ焼き、水餃子、おにぎり、昔のおもちゃ、幼児用景品のくじ引き、無農薬野菜、古本市、焼き鳥、Japanese風カレー、白玉団子、焼きそば等

#### ② 警備体制の実際

安全なイベントとするため招待券による入場であり、招待券は実行委員会メンバーから配布、または、事務局から日本人会会員へ送付する。さらに、祭り会場である学校に



児童生徒会ゲームコーナー

入場券を設置し、招待する人、人数を記入し、セキュリティー効果を上げる。警備員も当日は増員し、総勢28名で会場内外の安全確保のため活動する。

近隣地域への配慮のため、会場へやってくる200台以上の自家用車誘導（約10カ所の警備員立哨位置に会場案内・交通規制表示）もボランティア活動として重要である。

### ③スタッフとの連携（会場設営）

櫓造り、会場照明、放送機器、ゲスト席（400席）、模擬店（テーブル・ボード）、受付ゲート、会場表示、模擬店使用道具類（コンロ等調理用具・ガスシリンダー燃料）

※会場づくりは設置物でレンタルするものや購入物等多量になることから予算調整を念頭において準備する。



開始直前、警備グループとブリーフィング

## (2) 盆踊りの指導（本番で踊れる祭り参加）

児童生徒の役割として、踊りの模範演技グループ、和太鼓・お囃子演奏グループを構成し、祭り実施期日に照準を合わせて練習し積極的な参加姿勢を形作っている。

浴衣で楽しむ子ども達、半被姿の和太鼓打ちの生徒、盆踊りも自ら踊り身につくものとした活動である。盆踊り開催が近づくと約10日間、始業前に時間割に組み入れて（8：30～8：45）全校で輪になり練習する。炭坑節・東京音頭・子ども盆踊りの3曲を児童会・生徒会役員生徒をリーダーとして事前に養成し、全校生に踊りを広げる。盆踊りは自由に参加できるものだが、本番で踊れるように道筋をつけて盆踊りを体験することは大切だと感じる。

## (3) 大人神輿、子ども神輿の巡幸共演（インド人、又は現地校、インターナショナル・スクール関係者への御神輿の紹介）

御輿を担ぐことで自然に祭りに溶け込んでいけることがよく理解できる。このことが、盆踊りを楽しむことや模擬店（上級学年）運営にもつながり身も心も没頭できることになる。

クラスメートと共に祭りを形作り、また、家族の楽しみも織り込むことから計画的な動きも捻出されている。子どもは、一人三役（御輿、盆踊り・和太鼓、模擬店）の充実した祭り参加となっている。

## (4) 出店の企画と運営、広報活動

美術教科のなかでポスター作りをして、優秀作品をホテル、日本人会事務局、事業所等に掲示する。又、日本人会事務局からデリー在住の会員にイベント情報として e-mail で案内する。

## 6. 成果と今後の対応

来場する人には多くの浴衣姿があり、祭りの雰囲気盛り上げる。盆踊りにふさわしい着衣に袖を通して現地の人達と楽しむ姿にこそインド人と日本人の交流を一層実感する。地域からは、インド国で大切にされているインディペンデンス・デイ（独立記念日）記念行事に招待を受けてインド舞踊と和太鼓・お囃子を披露するなど、継続した交流の場が形作られている。日常の教育課程に位置づけられた国際交流による現地校、並びに国際学校との交流がベースとなっているからこそ各校生徒同士、楽しみな行事や活動が様々に広がっていると言える。

今後、来場者の増加によって品物販売数や買い求めるための時間を工夫しなければならないことになるだろう。行列ができはじめると、子ども達にはスケジュールが決まっているので列ぶわけにはいかないのである。又、購入数も大人が多量に注文するようなことがあると、なかなか子どもにまで食べ物や品物が回らないことも心配されて

いる。多数の来場があり祭りは盛り上がるのだが痛し痒しという状況になりつつある。

## 7. おわりに

祭りの一夜を過ごし親子が連れ添って、笑顔で「教頭先生、楽しかった」と帰り際に話すのを聞くと苦勞が吹き飛んでしまう。会場からの夜道を歩くとき、夕刻の楽しいひとときを振り返り家族が一体感に包まれる、そんな光景が思い出される。夏祭りは子どもがたいへん待ち遠しく楽しみにしていることである。海外に駐在しあらゆるストレスの中で多忙な生活を送る大人も同様であるが、今後、ともすれば飲食面でエスカレートして大人の楽しみばかりを期待する人も出てくるように思われる。主催する人たちの祭りのねらいに対する認識を揺るぎないものとする。「子どものために日本の伝統文化を子どもと共に作り楽しむ」ことが肝要である。



檣上で和太鼓、お囃子